

漢文訓読の初期条件（初稿）〔上〕

——なぜ孤立語を膠着語に変換できたのか？——

古田島洋介*

はじめに

漢文訓読とは、シナ・チベット語族に属する孤立語の古典中国語を、ウラル・アルタイ語族に属する膠着語の日本語に変換する技術です。返り点を打って語順を入れ換え、送り仮名として助詞・助動詞などを付ければ、たしかに古典中国語はあらずに日本語に変換できるのです。

しかし、そこには単なる外国語学習にとどまらぬ条件が備わっていたのではないでしょうか。というのも、歴史上、日本人は、インド・ヨーロッパ語族の西方チュートン系に属する屈折語のオランダ語・英語にも漢文訓読流の解読方式を試みたものの、その種の蘭文訓読・英文訓読は、確乎たる読解様式として定着しなかったからです。なぜ漢文すなわち古典中国語にだけ訓読方式が通用し、一つの様式として定着し得たのか。

しかも、それが過去の一時期に限られた話ではなく、今日なおも継続しているのか。その根本的な理由、いわば漢文訓読の初期条件について確認・整理を試みんとするのが本稿の目的です。

とはいえ、過去にさかのぼり、古人が何を考え、どう古典中国語に對峙しようとしたのか、また、実際のどのように對峙していたのかを詳細に探ることは、ほとんど不可能だと言って差し支えないでしょう。資料上の制約も多く、非力の私にはあまりに荷の重い課題、とてもやりとげる自信は持てません。

そこで、本稿では、あくまで現在の視点から、漢文訓読の初期条件を考えてみることにします。具体的には、今日の對照言語学の成果を援用して、漢文訓読が可能となった諸条件を探ろうというわけです。對照言語学と聞くと、何やら難しい話が始まりそうだと一瞬たじろぐかもしれませんが、そこは安心していただきたい。私とて言語学の専門家ではなく、正直に言って、對照言語学については通り一遍の大ざっぱな知識、いや、ほとんど摘まみ食いに近い知識しか持ち合わせていません。名こそ難しそうですが、要するに、日本語と漢文すなわち古典中国語とを見比べて両者の共通点と相違点を明らかにしようというくらいのお話です。決して耳慣れない言語学用語が飛び交うような事態にはなりませんから、どうぞ御懸念なく。

ただし、すでに右に記した孤立語・膠着語・屈折語についてだけは、本論に先だって説明しておきましょう。実のところ、こうした分類は、古典的言語類型論と呼ばれ、ざっと五千にものぼる世界の諸言語を必ずしもすっきり分類できるわけではありません。孤立語が部分的には膠着語の性質を帯びている場合もありますし、また、膠着語の一部分が屈折語に似た性質を、屈折語が何ほどか孤立語もどきの性質を呈する場合も

あります。文字どおり古典的な言語類型論にすぎず、言語の普遍的な性質を探究しようとする現代の言語類型論から見れば、いささか粗い印象を否めません。しかし、差し当たりの目安としては、少なからず有効な分類で、何かと便利なことはたしかです。この三者のほか、第四の類型として抱合語または包摂語 (incorporating [polysynthetic] languages) と呼ばれる言語もありますが、日本人にはあまりに馴染みが薄く、説明を試みてもややこしいかぎり、本論の内容にもまったく関係しないので、ここでは言及しません。

孤立語 (isolating [analytic] languages) とは、「孤立語」(孤立立つ語)、すなわち単語が一つひとつ独立していて、まったく語形変化を起こさず、常に一定の形で現れ、その品詞や文法機能は文中の位置によってのみ決まるという言語です。印象としては、語句がぼこぼこと並んでゆく感じ。中国語・タイ語などがこれに属し、漢文すなわち古典中国語もその一つにはかなりません。

たとえば、古典中国語の「書」という単語を掲げてみても、これだけでは名詞「書籍」の意味なのか、動詞「書く」の意味なのか、わからずじまいでしょう。けれども、次のように文中に入れば、その品詞と文法機能が周囲の語との関係によって確定できるのです。参考として、訓読文・書き下し文を示しておきます。

01 書其德行道藝。(『周礼』地官・党正)

〓書其德行道藝。(其の德行道藝を書す)。

*「書」は動詞で、「書く」意。下接する名詞相当語群「其德行道藝」を目的語とする。

02 桓公説書於堂上。(『莊子』天道)

〓桓公説書於堂上。(桓公書を堂上に読む)
*「書」は名詞で、「書籍」の意。上接する動詞「説」の目的語となる。

膠着語 (agglutinative languages) とは、「膠着語」(膠もて着くる語)つまり一つひとつの単語に、他の単語がまるで接着剤の膠で貼り附けたように附着する言語です。印象としては、語句にぐだぐだと尾ひれが付きまとう感じ。日本語・韓国語などがこれに属します。左のような日本語の一文を見れば、御理解いただけるでしょう。

03 病人には酒を飲ませられない。

*名詞「病人」に、助詞「に」+助詞「は」が附着する。

*名詞「酒」に、助詞「を」が附着する。

*動詞「飲ま」に、使役の助動詞「せ」+可能の助動詞「られ」+打消の助動詞「ない」が附着する。

屈折語 (inflectional languages) とは、「屈折語」(屈し折るる語)、すなわち一つの単語が、文法上の関係によって、あたかも折れ曲がるごとく、語形に変化を起こす言語です。印象としては、語句がぐねぐねと姿を変えながら進んでゆく感じ。英語・フランス語などがこれに属します。たとえば、英語の一人称代名詞と動詞〈write〉の基本三形を思い出してみてください。

04 I (主格) — my (所有格) — me (目的格)

05 write 〈現在形〉 — wrote 〈過去形〉 — written 〈過去分詞形〉

もっとも、現代英語は、屈折変化がかなり衰えてしまったので、まだしもと言えましょう。「行く」意の動詞〈go〉など、基本三形〈go—went—gone〉に加えて、三人称単数・現在〈goes〉さえ覚えておけば、まず間違いなく用が足りります。

しかし、フランス語となると、そうはゆかない。英語〈go〉に相当するフランス語の動詞〈aller〉の直説法〈現在形〉および〈単純未来形〉を示してみよう。それぞれ／＼の上が〈現在形〉、下が〈単純未来形〉です。

06 一人称	単数	vais / irai	複数	allons / irons
二人称	単数	vas / iras	複数	allez / irez
三人称	単数	va / ira	複数	vont / iront

一瞥^{いちいつ}しただけで、意気阻喪^{いきそぼう}するのではないでしょう。原形〈aller〉の面影をとどめるのは、一人称複数〈allons〉と二人称複数〈allez〉のみ。〈go〉が〈goes〉や〈went〉に変身するところの話ではありません。しかも、右は〈aller〉の変化のほんの一部分にすぎず、このほかに直説法だけでも〈複合過去形〉〈半過去形〉〈大過去形〉〈単純過去形〉などがあり、そのうえ、命令法はおろか、条件法〈現在形〉〈過去形〉や接続法〈現在形〉〈半過去形〉までもあるのです。しかも、この〈aller〉の屈折は、むしろ規則的なほうで、さらに語形変化が複雑な動詞も皆無ではありません。

もっとも、右のうち、本稿で頻出するのは、孤立語・膠着語の二つだけです。屈折語については、時おり英語やフランス語の平易な例を挙げ

るにすぎませんので、どうか安心してください。
では、右を踏まえて、漢文訓読という言語上の営為を可能にした諸条件を考えてゆくことにします。

* * *

当初、日本人が漢文すなわち古典中国語を純然たる外国語として学習しはじめたことに間違いはありません。今日の私たちが英語を学ぶのと似たような状況であったことでしょう。もちろん、現代とは異なり、辞書もなければ参考書もない。けれども、その学習の順序は、今とさして違わなかっただろうと想われます。

私たちが初めて英語を習ったときのありさまを思い出してみてください。まずはアルファベット二十六文字の名称・順序と書き方を覚える。次に、アルファベットを組み合わせた単語を学んで、その発音を習い、さらに、単語の排列法つまり文法を覚える——ざっと、このような手続きが外国語の学習の常道かと思えます。そこで、漢文についても、同様の学習過程^{プロセス}が存在したものと考え、以下、文字・単語、発音、文法の順序で話を進めることにしましょう。文字と単語を切り離さず、両者を一括して扱う理由については後述します。

一 文字・単語

日本人が初めて出逢った文字は、漢字という表意文字でした。当初は、何らかの洒落^{しやれ}た紋様か、何やら怪しげな呪術に用いる記号かと思ったやもしれません。けれども、ほどなく、それが文字すなわち言語を書き表す道具だとわかり、何とか意味を理解しようと努めるとともに、ほかに

文字というものを知らない以上、漢字で書き表される漢語をそのまま日本語のなかに大量に採り入れ、かつ——ここが肝腎です——日本語を表記する文字としても漢字を借用しようと決意したのでした。

日本人は、表音文字を知りませんでした。もし初めて目にしたのはアルファベット〈A, B, C, D〉のような音素文字であったならば、また、ハングル〈가・나・다・라……〉のごとく音素を音節に組み上げる文字であったならば、おそらく大いに事情が異なったことでしょう。「ア・イ・ウ・エ・オ」は〈a・i・e・o〉あるいは〈아・이・우・에・오〉と書き、「カ・キ・ク・ケ・コ」は〈ka・ki・ku・ke・ko〉もしくは〈카・키・쿠・케・코〉などと記し、甚だ難解な悉曇や反切の研究を経ずとも、ただちに子音や母音の共通性に着目して日本語の音韻を整理し、平安時代末期まで時間を費やすことなく、すみやかに五十音図の類を作成できたのではないかと考えます。

しかし、幸か不幸か、日本人が初めて手にした文字は、表意文字の漢字でした。子音と母音を分かつことなく、原則として一つの概念または事物について一字が対応する文字です。当然のことながら、その数は優に二万字を超え、字形・筆画の複雑なものも少なくありませんでした。習得は困難をきわめたはずですが、けれども、日本人にとって唯一の文字である以上、漢字・漢語そのものを学ぶにとどまらず、漢字を用いて日本語をも書き表そうと腹を据えるしかなかったのです。

ここで一気に話を転じ、森鷗外（一八六二—一九一二）が書き残した漢文訓読とドイツ語訓読とを観察してみましょう。

鷗外は、まず「朗読法に就きての争」と題する一文で、次のように、漢文訓読を「陰の仕事」と呼んでいます。文中、（ ）内の字句は理解の便を図るための注釈、歴史的仮名遣いのルビは恣意によるものです。

支那文（＝漢文）の朗読は、これを棒読に上より下へよみ下し、其音をも支那音（＝中国語の発音）にしてはじめて其法を得たりとすべし。〔中略〕兎も角も棒読だにせば、文法語格明ならむ。見よ、今人の洋文（＝英語・ドイツ語などの西洋語）を読むや、決して一字々々に（＝単語ごとに）これを邦語（＝日本語）に訳して、顛倒して（＝語順を入れ換えて）読むが如きことなきを。

されば支那文の今の読方（＝漢文訓読）は、まことはこれを読むにあらず、語を逐ひてこれを訳し、意味を辿りつゝ、これを声に発するのみ。わが西洋にありしとき（＝明治十七—二十一年〔1884—1888〕のドイツ留学中）、此読方のことを洋人（＝西洋人）に知らせむとして、坐間これを一二の学者に語りしに、皆未曾有の奇談なりと称へき。〔中略〕要するに邦人（＝日本人）の支那文を読む法（＝漢文訓読）は、陰の仕事にて、堂々とおもて立ちてなすべきことにあらず。

趣意はわかりやすいでしょう。——漢文は、書かれた語順どおりに中国語で発音してこそ「読んだ」と言える。それは、英語やドイツ語を語順そのままに原音で読むのとまったく同じことだ。漢文訓読は、一種の訳読法にすぎず、西洋人の目には奇異な読み方としか映らない。結局のところ、漢文訓読は、「陰の仕事」すなわち個人的な営みにとどめるべきものであり、人前で行ってみせるようなものではないのである。——幼いころから漢籍の素読に親しみ、多数の漢詩をも作っていた鷗外がこうした漢文訓読観を記していること自体、なかなか興味深いのですが、今は先を急ぎましょう。

鵬外は、右のような漢文訓読観を踏まえ、『山房拊掌談』に収めた一文「掲帝掲帝を三下り」で、左のごとく漢文訓読とドイツ語訓読とを披露しています。右傍線は原文ママ、() 内の字句は注釈、恣意に歴史的仮名遣いでルビを付け、適宜に引用符を加えておきます。

顛倒して(=語順を入れ換えて)支那文(=漢文)を読むべくば、
独逸文も争でか顛倒して読むべからざらむ。若「日月隠曜、山岳潜
形、商旅不行、檣傾櫓摧」を「日月ひかりをかくし、山岳かたちを
ひそめ、商旅ゆかず、櫓かたぶき櫓くだけたり」と読むべくば、
“Es laechelt der See, er ladet zum Bade, Der Krabe schlief ein am
gruenen Gestade”をも「でるぜえわらひ、ばあどをすゝむ、でる
くなあへみどりのげすたあでにねふりぬ」とも読むべきならむ。唯
熟く外国の文を味はむとおもふものは、原音のままにて真直に読下
すべきのみ。⁽⁸⁾

甚だ面白い一節で、鵬外は、漢文訓読式にドイツ語を訓読してみせる
ことによって、漢文訓読がいかに不自然な読み方であるかを指摘してい
ます。漢文「日月隠曜……」は、名文として知られる「宋」范仲淹「岳
陽樓記」の一節。また、ドイツ語“Es laechelt... Der Krabe...”は、シラ
ー J. C. Friedrich von Schiller (1759-1805) の名高い戯曲「ヴィルヘル
ム・テル」『Wilhelm Tell』の冒頭、すなわち第一幕第一場の最初の二行
です。

漢文のうち、右傍線の附いた「日月」「山岳」「商旅」「櫓」「檣」は、
いずれも音読みの語、つまり中国語の発音が日本風に訛ったものです。
それに対応して、右傍線が加えられたドイツ語の「でるぜえ」「ばあど」

「でるくなあへ」「げすたあで」も、すべてドイツ語の発音を日本語の近
似音に置き換えたもの。たしかに、漢文訓読もドイツ語訓読も、表面的
には非常によく似た現象です。念のため、それぞれの訓読文を示してみ
ましょう。ドイツ語の訓読中、○は訳語が当てられていない単語、つま
り漢文にいう置き字のごとく扱われている語です。

日月隠曜、山岳潜形、商旅不行、櫓傾櫓摧。

〈Es〉〈laechelt〉〈der See〉, 〈er〉〈ladet〉〈zum〉〈Bade〉,

○ わらひ でるぜえ ○ すゝむ を ばあど

〈Der Krabe〉〈schlief ein〉〈am〉〃〈gruenen〉〈Gestade〉,

でるくなあへ ねふりぬ に みどりの げすたあで

『ばあどをすゝむ』『みどりのげすたあでにねふりぬ』については、
〈zum〉〈am〉それぞれが含む前置詞に助詞「を」「に」を充ててみまし
たが、あるいは今日の訓読における句中の「於」のごとく置き字〃〇と
し、左のように返り点を打つほうがよいかもしれません。

〈ladet〉〃〈zum〉〈Bade〉,

すゝむ ○ ばあどを

〈schlief ein〉〃〈am〉〈gruenen〉〈Gestade〉,

ねふりぬ ○ みどりの げすたあでに

いずれにせよ、こうしたドイツ語訓読が、ドイツ語の読み方として邪
道の極みであることはたしかでしょう。そうだとすれば、漢文訓読とて

同じく邪道そのものの、漢文の読み方として、とうてい認められるわけがありません。鷗外の主張には、それなりに説得力があると考えてよいはずです。

けれども、その一方で、何か騙だまされているような気になるのもたしかではないでしょうか。漢文訓読とドイツ語訓読がまったく同じはずはない、と。そこで、気を取り直し、改めて両者を吟味してみることとします。

一つひとつの単語に日本語を充て、原文の語順を日本語の語順に入れ換える——この二つの作業は、紛れもなく両者に共通しています。しかし、それぞれの作業をよくよく考えてみれば、結果として大きな差異が生じていることは否定できないでしょう。

第一段階として、それぞれの訓読のなかで、鷗外が右傍線を附けた語句を再掲してみよう。

日月にちげつ 山岳さんかく 商旅しやうり 檣しやう 檣しやう
 でるぜえ ばあど でるくなあべ げすたあで

日本風に訛った発音で漢文・独文を読んでいる点は、たしかに共通しています。けれども、各語句をそのまま日本語として使えるかどうかとなれば、雲泥の差があると言ってよいでしょう。「日月」「山岳」は日本語の常用語彙でよし、「商旅」も、字面を見れば、おおよその意味は見当がつく。さすがに「檣」「檣」は難しいですが、それは音読みしているからで、「檣はばら」「檣かぢ」と訓読みすれば、ただちに意味が了解できるはずです。

それに対し、「でるぜえ」「ばあど」「でるくなあべ」「げすたあで」は、

いずれも意味がさっぱりわからず、つまり日本語としてまったく通用せず、よほどドイツ語に慣れていなければ、いや、たとえ慣れていたとしても、「でるぜえ」「でるくなあべ」の「でる」がドイツ語の定冠詞〈der〉だと見抜けなければ、何がやら理解できずに終わってしまうでしょう。

では、第二段階として、今度は書き下し文を見てみましょう。そもそもドイツ語には書き下し文など存在しませんが、ここでは語順を入れ換えて読んだ結果、すなわち鷗外が記した読法を書き下し文として扱います。

日月曜にちげつひかりを隠し、山岳形さんかくかたちを潜め、商旅行かず、檣傾しやうりかたふき檣摧げまくだけたり。
 でるぜえわらひ、ばあどをすゝむ、でるくなあべみどりのげすたあでにねふりぬ

鷗外の示した漢文の書き下し文は、訓読みの語すなわち和語をすべて平仮名で表記していましたが、その穏やかめかした見かけに幻惑されてはなりません。右のように、訓読みにも漢字を用いて「曜ひかり」「隠かく」「形かたち」「潜ひそむ」「行ゆく」「傾かたふく」「摧くだく」のごとく記せば、立派に日本語として成立します。否定の副詞「不」だけは、打消の助動詞「ず」を充てて読むため、仮名書きになっていますが。

ところが、ドイツ語の訓読文「でるぜえわらひ、ばあどをすゝむ、でるくなあべみどりのげすたあでにねふりぬ」は、やはり意味不明のままです。なるほど、「わらふ」「すすむ」「みどりの」「ねふりぬ」は、いずれも日本語ですから、意味は了解できます。しかし、それはドイツ語を日本語に訳した語句だからこそわかるのであって、決してドイツ語を訓

読みしたものではありません。〈laecheln〉(〈laecheit〉の原形)を「laecheln」^スと訓ずる習慣はなく、〈laden〉(〈ladet〉の原形)を「ladenむ」^スと訓読みする約束事ありません。同じく〈gruenen〉を「gruenenる」^スと発音する習慣もなければ、〈einschlafen〉(〈schliefein〉の原形)を「einschlafenる」^スと読むこともあり得ない。漢字・漢語と異なり、ドイツ語の語句には、訓読みが存在しないのです⁽¹⁾。

以上で、漢文訓読とドイツ語訓読との相違は明らかだろうと思います。漢字・漢語は、音読みするにせよ、訓読みするにせよ、字面そのままに日本語に取り入れることができる。けれども、ドイツ語の単語は、日本語に訳して、漢字または仮名で表記しなければ、とても日本語として通じるものではない、ということです。言葉を換えれば、漢文の語彙は、そのまま日本語として採用できるが、ドイツ語の語彙は、日本語に訳して、日本語の表記に馴染むよう加工を施さなければ、とても日本語にならない、となるでしょう。この事情は、独文訓読のみならず、実は蘭文訓読・英文訓読などにも当てはまります。

このように見てくれば、漢文訓読が可能になった根底的な条件は明らかでしょう。それは、中国の漢字・漢語を大量に借用して、日本語の語彙とすると同時に、日本語を表記する文字としても用いようとした決意、すなわち漢字・漢語を自家薬籠中の物とせんとする意志にはかなりません。

外国語の借用そのものは、ありふれた現象で、おそらくどの言語にも見られることでしょう。また、それを自国語に合うように使いこなすのも、決して珍しい現象ではありません。日本語「空手」「津波」などは、そのまま英語〈karate〉〈tsunami〉として立派に通用しますし、日本のビジネスマン(これも英語からの借用語)が「朝飯前」の直訳〈before

breakfast〉を頻繁に使った結果、アメリカの一部で〈before breakfast〉が英語の表現に昇格したのも一種の借用現象です。日本の「柿」がイタリアに輸入され、初めは日本語のまま〈cach〉^{カキ}と呼んでいたものの、語尾〈ち〉がイタリア語では複数形に聞こえるため、「柿」一個のときは〈caco〉^{カコ}と言うようになったのも、自国語への加工の結果でしょう。むしろ、ヨーロッパ語どうしても、こうした借用は枚挙に遑なし。たとえば英語の言い回し〈it goes without saying that...〉(～は言うまでもない)が、フランス語〈il va sans dire que...〉の直訳表現であることは、誰の目にも明らかだろうと思います。

けれども、語彙・表現を文字・表記もろとも借用したのかとなれば、話はまったく異なります。「空手」「津波」はアルファベット〈karate〉〈tsunami〉に姿を変えていますし、アメリカ人が「朝飯前」をそのまま記し、語順を入れ換えて「朝^{ブレファスト}飯^{ティフキー}前」^{朝飯前}と読むことなど想像もできません。「柿」も、単数形〈caco〉にせよ、複数形〈cach〉にせよ、アルファベットで綴ることに変わりはなく、決して〈un 柿〇〉(柿一個)だの〈tre 柿i〉(柿三個)だのとは記しません。フランス語〈il va sans dire que...〉をそのまま英語で〈il va sans dire que...〉と発音することなど考えられもしないでしょう。

しかし、右に挙げたような奇妙な借用を、私たち日本人は漢字・漢語に対して大量に、組織的に行ったのでした。言い換えれば、すべての漢字・漢語が日本語に対して開かれているということになります。これを《文字・語彙大量借用律》と呼んでおきましょう。

しかも、そこには漢字ならではの特殊事情が存在しました。それは、原則として、一つの文字がそのまま一つの単語に、いや、たいていは二つ以上の単語に相当することです。これは、学ぶ側からすれば、なかなか

か有利な条件と言えましょう。たとえば、「書」という字を覚えれば、「かく」「ほん」「てがみ」(=write, book, letter)などの意味を書き表すことができますし、「我」を習えば、「われは」「わが」「われを」(=I, my, me)のいずれをも書けることになります。むしろ、字を学んだだけでは語彙が足りず、「書」ならば、「書写」「書籍」「書簡」などの熟語も覚える必要があります。「我」についても、他の一人称代名詞「吾」「予」「余」や「朕」をわきまえたうえで、「我欲」「吾人」「余輩」などの熟語をも知らねばなりません。たしかに漢字は数が多く、それを組み合わせた熟語も膨大な数に達します。加えて、「不得已」(不得^{ムラ}己^ヤ)を得^えず)のように三字から成る表現もありますし、「傍若無人」(傍^{ラニシ}若^ニ無^レ人^{ヒト}に人^{ヒト}無^レき^{キガ}が若^{ゴト}し)のような四字成語も多数にのぼります。しかし、漢字を日本語の表記に用い、その語彙をも借用しようと決めたからには、どれほど苦しくうと、日本人は漢字・漢語の習得に励んだはずで、そして、その気になりさえすれば、漢字・漢語を習得する負担は、今日の私たちが想像するほど重くはなかったのかもしれない。今日、英語を習得するのは、たしかに難しい。アルファベット二十六字を覚えたとして、英語で一字がそのまま一単語になるのは、〈E〉(不定冠詞)、〈I〉(一人称代名詞)、〈O〉(感嘆詞「ああ、おお」)くらいなもの、無理をしても〈Z〉(軒^{いひき}の音)まで含めるのがやっとでしょう。Eメールで用いるCUL (=see you later) のC (=see) やU (=you) の類を正式の単語と認めることはできません。またπ (円周率) やe (自然対数の底) などの記号はもちろんのこと、Q (=question) and A (=answer) やthe three R's (=reading, writing, arithmetic) といわゆる「読み書き算盤」に見られる略号〈Q, A, R〉の類も、やはり正規の単語とは言えないでしょう。単語を覚えるには、そのアルファベットの

組み合わせを記憶せねばならず、しかも、英語は、発音と綴りの対応が混乱をきわめているため、発音できるからといって、正確に綴れる保証はありません。ところが、実際はどうか。ちょっと英語ができる人ならば、〈laugh〉を〈lauf〉だの、〈height〉を〈hight〉だのと綴りはしないでしょうし、〈doctor〉や〈prior〉を〈docter, priet〉と記すこともないでしょう。何事も、やる気さえあれば何とかなる。まさに〈Where there's a will, there's a way〉です。

すでに日本語の表記体系ができあがっているうえに英語を学ぶ場合でも、こうした実情なのでから、ましてや自らの日本語を表記する文字として漢字を学び、漢語をも語彙に加えるとした日本人にとって、習得の苦労など何のその、ひたすら漢字を学び、どしどし漢語を語彙に加えていったに違いありません。

漢字を日本語の表記文字として大量に借用し、なおかつ、漢語をも日本語の語彙として大量に借用しようと決意したこと——この《文字・語彙大量借用律》こそが漢文訓読を支える基底条件であったと考えてよいでしょう。

二 発 音

大量の漢字・漢語を借用しようと決意した日本人のまえに立ちはだかったのは、発音の問題です。漢字は表意文字とはいえ、意味だけわかって発音できないのでは、甚だ精神衛生に悪い。日本人は、この問題に対して二種の方法で立ち向かいました。言わずと知れた音読みと訓読みです。

ア 音読み

漢字・漢語を大量に借用しようと決めた以上、まずは漢字・漢語を学ばなければなりません。そして、学ぶからには、なるべく中国語の原音に忠実な発音を心がけるのが、今日の常識に照らしても当然のことでしょう。実際、古人は、中国人の先生から発音を習い、日本人の先生から解釈を学んでいたのです。つまり、ネイティブ・スピーカーの教師について発音を教わり、日本人の教師から解釈を説明してもらう——これは現代の外国語教育とまったく同じと言って差し支えありません。

具体的には、律令制のもとで存在した大学寮という官僚養成機関での話です。音博士と呼ばれる中国人の教員が発音を教え、日本人の教員が解釈を担当していました。遣隋使・遣唐使の派遣により、この正式な外交ルートを通じて中国人教員を確保できたのです。⁽¹²⁾

大学寮では、厳しい試験が行われていました。発音については、帖経じょうけいと呼ばれる試験が実施されます。帖経とは、経書けいしよ（儒教の聖典に当たる書物）の一部を附箋で隠し、その隠された文字を答えさせる試験です。

経書のなかから一千字を選んで、そのうちの三字を隠し、それを中国語で正確に暗誦できるかが試されました。また、解釈については、二千字のなかから一箇所を選び、その大意を正しく説明できるかが問われました。それぞれ三題を課し、全問または二題が正解ならば合格ですが、一題しかできなければ、あるいは、三題すべてが不正解ならば、その怠け具合に応じて答打ちむちうちの罰が科されます。⁽¹³⁾もし今日の大学でこのような試験を実施したら、文字どおりの大騒ぎ、たぶん漢文の担当教員は血祭りに上げられ、有無を言わず懲戒解雇になってしまいうでしょう。

『源氏物語』^{をとめ}少女巻に、光源氏が元服した息子の夕霧を大学寮に入れて漢学を修めさせようとする場面が出てきます。光源氏は、夕霧を右のような厳しい漢学の修業にさらそうと決意したのです。それは、「なほ才をもととしてこそ、大和魂やまとたましひの世に用ゐらるる方も強う侍らめ⁽¹⁴⁾」という考えからでした。

とはいえ、遣唐使が八三八年の派遣を最後として、八九四年には制度そのものが廃止され、中国人の音博士の人材確保が難しくなったため、次第に中国語の発音が怪しくなっていたのは避けがたい事態だったことでしょう。唐に留学した学僧・学生たちの発音も、しだいに日本風に変わってしまったに違いありません。最終的には一七七年の京都大火で大学寮も焼失した結果、日本人は中国語の発音を学ぶ公的な場を失ってしまいました。むろん、日本人とは言っても、ほぼ貴族に限られる話で、その後、日宋貿易のルートなどを通じて、中国に渡った僧侶たちもいたわけですが。

けれども、推測するに、漢字の発音は、ずっと早くから、おそらくは中国語の発音を習うのとはほぼ同時に、すでに発音の日本化が始まっていたのではないのでしょうか。それは、現代の我々が英語の単語をどのような発音で借用しているかを見れば明らかだろうと考えます。

たとえば、アメリカの地名「カリフォルニア」です。我々は英語の知識として「California」が /kæləˈfɔːrniə/ と強弱アクセントを以て発音されることを知っている。英文を読んでいるなかで「California」が出てくれば、当然——上手か下手かはさておき——/kæləˈfɔːrniə/ と発音します。実際、私の知るかぎり、/kæləˈfɔːrniə/ の第一アクセントが置かれる「kæl」はかなり強く、ある若いアメリカ人女性に出身地を尋ねたとき、その女性の答えは、早口であったせいもあり、ほとんど「べい」しか

聞こえず、〈California〉だとわかるまで数秒を要した経験もあります。

英語の強弱アクセントは、日本人の耳には甚だ聴き取りづらいのです。

けれども、日本語のなかで「カリフォルニア」を言うときは、どうでしょう。

「カリフォルニアではワイン造りが盛んらしい」という一文を口にするとき、「/kælɪfɔːrniə/では……」と発音するでしょうか。英

米人をはじめとする外国人であればいざ知らず、日本人ならば、どれほど英語が達者であろうと、日本語になじむような母音を差し挟み、高低アクセントを用いて、誰もが「カリフォルニア /kariforunia/ では……」

（左傍線＝低、右傍線＝高）と発音するでしょう。「フォ」が不得意な人ならば、「カリホルニア」と言うかもしれません。末尾の「ア」を露

骨に「ヤ」と発音する向きも多いでしょう。実際、それでも日本語としては十分に通じるのです。「ワイン」のような短い単語でさえ、日本語

のなかで発音するとなれば、/wain/ではなく、/ʔain/のごとく発音している人が大半ではないでしょうか。語頭の /w/ でしっかり唇を丸め

ないため、何となく /w/ と /h/ の中間のような音 /ʔ/ になり、語末の /n/ もつい鼻に抜けて /ŋ/ となってしまう——明治維新から約五十年

を経ても、これが日本人の日本語として話す英語の実情かと思えます。

右は、外国語からの借用語すなわち外来語にあまねく共通する事情だろうと考えます。「アルバイト」がドイツ語 Arbeit だとわかっていて

も、誰も日常会話のなかで /arbat/ とは発音しません。母音 /ɛ/ や /o/ を補い、高低アクセントで「アルバイト /arubaito/」と発音してこそ日

本語の生理に合うわけです。朝鮮民族の漬け物〈Kimchi〉も然り。唐辛子で真っ赤に漬け込まれた白菜キムチを食べながら、/gimchi/ と発音する

向きは皆無でしょう。破裂音を語頭にも用い、さらに母音 /ɛ/ をも補って「キムチ /kimuchi/」（敢えてハングルで記せば〈Kimchi〉）と言

うのがふつうかと見受けます。

右と似たような事情が漢字・漢語の発音にも当てはまるのではないで

しょうか。中国語の発音をそのまま日本語に持ち込んだのでは具合が悪い。

中国語として発音を学ぶときは、もちろん中国語の発音を正確に再現しようとするでしょう。しかし、漢語を日本語の語彙として借用しよう

と決意した以上、日本語としては当然のごとく日本風の発音に改めて口にしたものと推測します。

この推測を強くするのは、現在の地図帳における中国の地名の表記です。何とか現代中国語の標準語（いわゆる普通話）に近づけようと片仮

名表記がどこされ、該当する漢字が後方のカッコ内に添えられているのですが、実のところ、その片仮名表記は、原音には程遠い日本風その

ものの発音を何の工夫もなく記しているだけで、まったく役に立ちません。/n/ と /ng/ の区別もなく、「山東」Shan²dong¹ や「南昌」

Nan²chang² を「シャントン」だの「ナンチャン」だのと発音してみても、決して中国人には通じないでしょう。「成都」の「成」Cheng² と

「重慶」の「重」Chong² は、互いに発音が異なるのに、いずれも「チョン」と記し、「成都」が「チョントウ」、「重慶」が「チョンチン」で

は、中国語も何もあったものではない。かつて「成都」が「チョンツ」と記されていたことを想えば、「都」du² が「ツ」から「トゥー」

になっただけ進歩したとも言えますが、まったく中国人に通じない点では五十歩百歩でしょう。しかも、何とか標準中国語音に近く表記しよう

とする方針が一貫しているならばともかく、「北京」Bei²jing¹ や「南京」Nan²jing¹ は、昔ながらに「ペキン」「ナンキン」と記されているの

ですから、何をか言わんやです。どうせ通じないまでも、せめて基本方針に殉じて（「準じて」ではありません）、「北京」は「バイチン」、「南

京」は「ナンチン」と記してほしいところです。むろん、ここまで中国語の発音記号に数字番号を付けて示しているとおり、中国語には屈曲に富んだ第一声く第四声の声調、いわば旋律アクセントがあり、それを正確に守りつつ発音しなければ、まったく中国語として体を成しません。この点でも、中国語の片仮名表記には——取り立てて種々の工夫を凝らさなければ——根本的な限界があるのです。

その気になりさえすれば、現今、中国人に正しい発音を教えてもらう機会はいくらでも作れるでしょう。また、録音機材を使って正しい発音を学ぶことも容易なはずで。しかし、実際は今なお右のような体たらく。況んや往時においてをや。たとえ大学寮で正しい発音を習ったとしても、その発音は、時を措かず日本風に、とりわけ日本語の発話のなかで用いられたさいには、まず確実に日本風になってしまったのではないでしょう。

中国語の発音が日本風に訛ったのが日本漢字音であることは事実です。けれども、その実情は、「次第に訛った」のではなく、「口にしたら勝手に訛った」のではないかと想像します。おそらく、それは予想以上に短い時間であり、ほとんど同時と称してもよいくらいだったのではないでしょうか。

イ 訓読み

日本人は、小学校低学年の幼いころから、漢字の音読み・訓読みに慣れています。「山」ならば、音読み「サン」、訓読み「やま」という具合。今さら確認するのも愚かしいほど、訓読みの存在は、日本人にとって当たりまえのことでしょう。

けれども、この訓読みという言語現象は、きわめて特殊な性質を帯びているのです。漢字という外国語の単語を持ち来たって、それに相当する自国語の単語を探す——要するに、外国語を自国語に翻訳するわけですから、ここまでは、どの言語にも見られるありふれた作業です。ところが、その自国語の単語を、当の外国語の単語の読みとして、つまり発音としても用いる——これが訓読みの特殊性なのです。

朝鮮民族は、日本と同じく、中国から大量の漢字・漢語を借用しました。現在の朝鮮半島は、ほぼハングルの専用状態ですが、もと漢語であった単語を漢字で表記すれば、その比率は、日本語における漢語の比率をも上回ると言われているほどです。旅行でソウルを訪ねた経験があれば、誰しも「なぜ漢字で書いてくれないのか」と嘆いた経験があることでしょう。事実、ハングルで「叶」だの「恩廻」だのと書かれた看板を見てもチンプンカンプンですが、もし漢字で「葉」「銀行」と記してあれば、すぐ「あそこが薬局だな」「こっちが銀行か」とわかります。また、「全斗吉」では、何のことやらわからなくとも、「消火器」と書いておいてくれれば、見たとたん、「なるほど、それで赤い箱に入っているんだな」と納得できるわけです。こうした例は、枚挙に遑がありません。それほど日本と朝鮮半島に共通する漢字・漢語は多いのです。今はハングルに身をやつしているから、わからないだけのこと。せめてハングルに漢字を添えてくれれば、私たち日本人の韓国旅行も、ずいぶん気安なものとなるに違いありません。

ただし、ここで注意してほしいのは、「叶」「恩廻」や「全斗吉」が、あくまで「葉」「銀行」そして「消火器」の音読みだということです。もちろん日本語でも「葉」「銀行」「消火器」と音読みすることは可能ですが、同時に、「葉」「銀行」「消火器」のごとく、漢字それぞれに

訓読みを当てはめて訓読することもできます。ここが肝腎なところ。韓国語では漢字に音読みしか存在しないのに対し、日本語では漢字に音読みと訓読みが存在するのです。

もう一つ、「風」を例に挙げてみましょう。言うまでもなく、日本語では、音読み「フウ」と訓読み「かぜ」の双方が存在します。けれども、韓国語では音読み「フン」が存在するだけで、訓読みは存在しません。むしろ、風は人間の日常生活に密着した気象現象ですので、韓国語にも「かぜ」に当たる「바람」という単語が歴として存在します。しかし「風」を韓国漢字音で「フン」と音読みし、日本語と共通の語彙「풍경」(風景)・「풍속」(風俗)・「풍류」(風流)などが存在するものの、「風」を「바람」と発音する習慣はない、すなわち訓読み「風」は存在しないのです。

同じく中国から大量の漢字・漢語を借用しながら、つまり、日韓ともに《文字・語彙大量借用律》が成立しながら、日本語に訓読みが存在するのに対し、韓国語には訓読みが存在しません。この現象は、どのように考えればよいのでしょうか。おそらく、朝鮮民族は、漢字・漢語を操って自分たちの思考を書き表そうとしたのに対し、日本人は、漢字・漢語を同じ目的に使うのと同時に、自分たちの言葉を書き表そうとしたからでしょう。そして、漢字で日本語を表記するということは、逆に言えば、漢字に日本語を当てはめ得ることを意味します。すなわち、漢字をそのまま日本語に移し換えることが可能になったわけです。これを《国語充当律》と呼びたいと思います。

ここで『論語』冒頭の有名な一句「有朋自遠方来、不亦楽乎」の訓読を見てみましょう。

07 有朋自遠方来、不亦楽一乎。(『論語』学而)
 朋有り、遠方より来たる、亦た樂しからずや。

音読みは「遠方」のみ、その他はすべて訓読みです。漢文訓読に対して、いかに訓読みが貢献しているかがわかるでしょう。韓国語では、この手が利きません。漢字はすべて音読みし、句間・句末にハングルで論理関係や情感を表す語を付け加えるのが、韓国の代表的な漢文読解方式です。かつては、日本の片仮名にも似た文字を記す「口訣」(口訣)が用いられましたが、現在は、ハングルでその種の語を記す「懸吐」(懸吐)が使われています。

08 有朋自遠方来、不亦樂乎。⁽¹⁶⁾

漢字の音読みを片仮名による近似音で示し、送り仮名のごとく加えられたハングルの意味を平仮名で記せば、「ユブンがジャウォンバンレならば、プリョクラクホダなあ」となります。そのまま日本語に移し換えれば「イウホウがジュンパウライならば、フエキラクコダなあ」。正直に言って、お経の棒読みのようなものの、ほとんど意味が理解できないでしょう。訓読みの有難味がわかるというものなのです。

ただし、我々日本人にとっては当然の訓読みという営為が、言語現象としては、きわめて特異なものだということをわきまえておく必要があります。たしかに、英語でも、ラテン語に起源を持つ略語を読むとき、訓読みに似たような現象が見られます。たとえば、<etc>(ラテン語 et cetera)を<and so forth>と読んだり、<ie>(ラテン語 id est)を口頭で<that is (to say)>などと言い換えたりするのが、英語によ

るラテン語の訓読みだと考えることはできるでしょう。けれども、それは特定の語句に限られた現象であり、とても英語という言語が体系的に備えている特徴とは言えますまい。

日本語と同じく、訓読みという現象が数多く見られる言語は、私の知るかぎり、いや、知ったかぶりをするかぎり、中世ペルシア語（いわゆるパフラヴィー語 Pahlavi）だけです。アラム語の単語を借り、それに中世ペルシア語を当てはめて発音したのでした。このように用いられたアラム語の単語、すなわち中世ペルシア語で訓読みするアラム語の語彙をウズワリーシュン *uzwarišn* と呼びますが、左に若干の例を挙げてみましょう。すべてローマ字化して記します。大文字がアラム語、小文字が中世ペルシア語を表します。アラム文字は、アラビア文字などと同じセム語系の文字のため、子音しか記しませんが、今、中世ペルシア語については、その発音をローマ字で示しておきます。

09 「意味」 「アラム語」 「中世ペルシア語」

男	GBR	mard
女	NYŠH	zan
夜	L'LY'	šab
名前	ŠM	nam
行く	ZLWN-tn	šudan
来る	Y'TWN-tn	amadan

「男」を意味するアラム語〈GBR〉を、その発音に関係なく、「男」を意味する中世ペルシア語〈mard〉を充てて読む。「女」の意のアラム語〈NYŠH〉を、その発音は無視して、やはり「女」の意の中世ペルシ

ア語〈zan〉を充てて発音してしまう。まさに「男」を「おとこ」、「女」を「おんな」と読む日本語の訓読みと同一の現象です。同様に〈LYLY'〉や〈ŠM〉も、のっけから〈šab〉〈nam〉と読んでしまうのです。

面白いのは、「行く」意の〈ZLWN-tn〉や「来る」意の〈Y'TWN-tn〉に付けられた〈-tn〉です。これは中世ペルシア語の発音補辞で、アラム語〈ZLWN〉〈Y'TWN〉に中世ペルシア語〈šudan〉〈amadan〉を引き当てるべく発音を補った綴りですから、さしづめ「行く」「来る」の送り仮名「く」「る」に相当するものと考えてよいでしょう。

こうした中世ペルシア語のウズワリーシュンは、日本語の訓読みと同等の体系的言語現象で、名詞・代名詞・形容詞・接統詞・前置詞など、各種の品詞にわたって認められます。訓読みができなければ日本語が読めないのと同じく、ウズワリーシュンがわからなければ中世ペルシア語も読めません。実際、中世ペルシア語の文章には、ウズワリーシュンが頻繁に出現します。

ただし、中世ペルシア語のウズワリーシュンと日本語の訓読みとは、やはり大きな相違があることも否定できないでしょう。

第一は、ともに体系的な言語現象とはいえ、体系の規模が異なることです。日本語では、原則として、すべての漢字に訓読みがあります。どれほど少なく見積もっても、現行の「常用漢字表」が載せる約二千一百字に訓読みが存在するわけです。むしろ、該表を見ればわかるとおり、「簡・巨・毒・賢」など、音読みしか認めていない漢字も散見し、実際、この四字と同じく、まず訓読みを用いることのない漢字も多々あります。これに対し、中世ペルシア語のウズワリーシュンは、約一千語にとどまり、一九〇〇年ごろまでに判明した中世ペルシア語の総語彙数約

六十二万八千語と比べれば、その比率はかなり低いと考えてよいでしょう。一読してお気づきのとおり、この比較はそれぞれ基準が異なるため客観性を欠きますが、一つのめやすにはなるかと思えます。右に述べたように、出現頻度という点では、ウズワリーシユンも日本語の訓読み漢字に優るとも劣らぬ重要性を持ち合わせています。しかし、約一千語となれば、語彙全体に占める割合は、漢字の訓読みに比べれば、はるかに低いものと見積もってよいでしょう。漢字の訓読みが約一千にとどまるという話は、耳にした覚えがありません。

第二は、生命力の強さです。今日でも日本語の訓読みが生き残っているのに対し、アラム文字で表記されていた中世ペルシア語のウズワリーシユンは、「中世」という呼称から自明なとおり、ペルシア語がアラビア文字で記されるようになった九世紀以降の近世ペルシア語では滅びてしまいました。その消失時期は、遅く見積もっても十世紀半ばごろと考えて差し支えありません。つまり、六五一年にササン朝が名実ともに滅亡し、中世ペルシア語が公用語としての地位を失ってから約三百年後には、ウズワリーシユンという訓読み現象も立ち消えになってしまったのです。ウズワリーシユンは、もはや歴史上の存在にすぎません¹⁷⁾。

言うまでもなく、日本語の訓読みが古代から現在まで継続しているのは、他民族や他国の支配下に入って漢字以外の文字を強制された歴史がないからです。それと同時に、近隣の東アジアにおいて、歴史上、中国に匹敵する、または中国を凌ぐような強国が出現しなかったことも有力な原因に数えてよいでしょう。もしモンゴル帝国が強大な勢力を保ち続け、漢字を敵視して根絶やしにするような事態が起こっていたら、そして、一二七四年・一二八一年の元寇で日本軍が一敗地に塗れていたら、日本人は、必要に迫られた揚げ句、何とか仮名だけは残して漢字を捨て、

フビライが一二六九年に公布したパスパ文字を採用して、今ごろ和パ混淆文を綴っていたかもしれません。

ウズワリーシユンが中世ペルシア語にもたらした難解さが日本語の訓読みの不便さにも通じることはたしかでしょう。たとえば、「そこは観光スポットでもなく、人氣のない場所だった」と書かれたらどうでしょうか。「人氣」が「人氣」なのか「人氣」なのか、わからずじまいです。また、「彼を助けるために、敢えて行ったのだ」も、勇ましい印象を与えこそすれ、「行った」のか「行った」のか、この一文だけでは判然としません。前者であることを明確にしようと平仮名で「いった」と書けば、今度は「行った」なのか「言った」なのか、これまた不明朗に陥ってしまいます。たとえ誰かが「行った」は「行った」、「行った」は「行なった」と書き分ける慣わしだと言っても、それはしよせん個人の表記習慣にすぎず、他人がそのように読み分けてくれる保証はありません。短文とはいえ、文章でさえこのありさまなのです。単語となれば、さらに事態はややこしくなります。「大家」が「大家」なのか「大家」なのか。「最中」は「最中」か「最中」か、はたまた和菓子「最中」か。漢字について、音読みのみならず、訓読みをも併用する日本語は、発音が甚だ不安定で、振り仮名がなければ、どう読めばよいのか、確定しかねることが少なくありません。

訓読みは漢字が表意文字だから可能であったという見解をしばしば耳にします。たしかに、漢字は、アルファベットのようには子音と母音を書き分ける表音文字ではないので、数学の記号「+・-×÷」などと同じく、何語でどう読もうと意味に変わりはないと言えるでしょう。だからこそ、日本語を漢字に充てやすかったのは、紛う方なき事実だと思います。しかし、それは、あくまで訓読みを容易にする一因にすぎず、

決定的な要因とはなり得ません。前に述べたように、日本語と同じく大量に漢字・漢語を借用した朝鮮半島には訓読みが存在しない。また、アラム文字という表音文字で記されたアラム語を中世ペルシア語で訓読みするウズワリシユンという言語現象が存在しました。表意文字だからといって訓読みが発生するとはかぎらず、表音文字だからという理由で訓読みは不可能だともかぎりません。要するに、日本語の訓読みは、《文字・語彙大量借用律》だけでは説明がつかず、やはり《国語充当律》をも強く指定めねばなりません。中国語の文字すなわち漢字と、中国語の単語すなわち漢語とを大量に借用しようと決意したうえで、さらに漢字を日本語の表記にも用いようと決心したこと——これが訓読みを可能にしたのです。言い換えれば、漢字に日本語を分かちがたいほど馴染ませようとする意志、または逆に、漢字を徹底的に日本語化してしまおうとする意志こそが訓読みを生んだのでした。

三 文法Ⅰ 品詞

品詞は、もともとヨーロッパ語の文法のなかから生まれた概念です。古典ギリシア語で書かれた作品を読解するための分析作業の過程で品詞の概念の原形が登場し、その後、中世のラテン文法のなかで、品詞という概念が確立しました。この品詞概念を引き継いで、十八世紀後半に英文法書が著されることになります。具体的に言えば、現代の我々日本人が負っている品詞の概念は、英文法の品詞、つまりラウス Robert Lowth (1710-87)『簡明 英文法入門——批判的注釈付き』A Short Introduction to English Grammar with Critical Notes, 1762と¹⁸⁾、それを受け継いだマレー Lindley Murray (1745-1826)『英文法』English

Grammar, 1795 による品詞概念を基礎としています。⁽¹⁸⁾ 日本語文法における品詞概念は、英文法にいう品詞を日本語に合うよう改良を加えたものにすぎず、中国語文法の品詞概念も同様です。ですから、中国語や日本語では、品詞という概念が今一つすっきりとは当てはまらない場面も生じます。そもそも屈折語たるヨーロッパ語の文法で生まれた概念なのですから、孤立語たる中国語や膠着語たる日本語の文法に持ち込もうとしても、無理を来たす場面が生ずるのは当然のことでしょう。しかし、品詞を上回る分析用の概念が見当たらない現状では、品詞に頼らざるを得ず、ここでも原則として、我々が常識としてわきまえている英文法の品詞概念を用いることにします。

以下、漢文の品詞は、左の九種に分かつこととしましょう。英語にいう主要八品詞を念頭に置いて、冠詞は名詞と同時に扱うこととし、助動詞を増やして九品詞としただけです。すんなり受け取れると思います。あくまで英語の品詞分類に副^そつたもので、中国語の文法に特有の用語は使いません。なお、〈interjection〉を間投詞と訳すと、字面が日本語の間投詞と紛らわしく、要らざる思い違いを招くおそれがありますので、本稿では感嘆詞と名づけることにします。

- ① 名詞〔附〕冠詞 ② 代名詞 ③ 形容詞 ④ 副詞 ⑤ 動詞
- ⑥ 助動詞 ⑦ 前置詞 ⑧ 接続詞 ⑨ 感嘆詞

① 名詞〔附〕冠詞

漢文すなわち古典中国語は孤立語ですから、名詞が格変化を起こしたり、文法性によって分かれたりしません。つまり、ドイツ語のように主

格・所有格・奪格・与格と変化することになれば、フランス語のごとく男性名詞と女性名詞、あるいはドイツ語・イタリア語のごとく、さらに中性名詞が加わるようなことはありません。また、そもそも冠詞は存在せず、時おり現れる「一」が冠詞を思わせるだけです。次のような文の「一」は、英語〈sharpen a dagger〉と対照すれば、たしかに冠詞のように見えるでしょう。

10 磨^ツ二小刀子^ニ。(唐) 李復言『続玄怪録』「定婚店」

* 小刀子^ニ 短劍^ニ。

一 小刀子^ニを磨く。

しかし、こうした「一」がそれこそ「一」々名詞に附くわけではありません。一般に名詞は、冠詞のごとき「一」を伴うことなく、剃き出しのまゝ用いられます。したがって、漢文に冠詞は存在せず、その名詞に単数・複数の区別もなく、したがって可算名詞・不可算名詞の区別もありません。次の例文を見てください。

11 有^リ二老人^ニ、倚^リ布囊^ニ、坐^シ於階上^ニ、向^カ月檢^ス書^ヲ。(同10)

老人^ニ有^リ、布囊^ニに倚^リ、階上^ニに坐^シし、月^ニに向^カかつて書^ヲを檢^{ケン}す。

「老人」がいて、布の「袋」によりかかり、「階段」の上に坐って、月明かりのもとで「書物」を調べていた。

訳文のなかで括弧を附けた名詞に注目してください。それぞれの原文「老人・囊・階・書」には、単数・複数の区別がまったく記されていません。けれども、我々はそれを曖昧とは思わず、常識に従って判断し、

きちんと脳裡に映像を描けるのです。特に数詞が記されていないので、たぶん「老人」は一人だろう。一人がよりかかっているのだから（大黒様を連想するにせよ、サンタクロースを思い起こすにせよ）「袋」も一つに違いない。その「袋」に「老人」がよりかかっている以上、「階段」が一段では狭すぎるから、足を下ろしている段まで含めれば、少なくとも三段はあるか。おそらく「書物」も一冊だろう、いや、昔のことだから、一冊ではなく一巻か——などと。単数・複数の区別がないことに苛立ちもせず、なぜこのような判断が利くのかと言えば、それは日本語もまったく同じだからです。日本語の名詞にも基本的には単複の区別がない。冠詞も附かなければ、格変化もなく、可算・不可算の区別もなく、もちろん、やれ男性名詞だの、やれ女性名詞だのと、小うるさい文法性もありません。したがって、漢文の名詞は、日本人にとっては至って処理しやすいのです。参考までに、右の11の英訳を示しておきます。下線部の冠詞および名詞の単複に注意してください。英語がいかに性質の異なる言語かがよくわかるでしょう。

12 An old man resting against a bag was sitting on the steps, studying a book by the moonlight.

もちろん、場合によっては、名詞が単数なのか複数なのか判然とせず、単複の区別さえ記してくれば、と思うことがあります。実は、有名なはずの07もその例に漏れず、「方」の解釈によっては「朋」を複数と考えることもできるのです。

13 有^リ二朋自^{ヨリ}遠方^ニ来^ル、不^タ亦^レ樂^シ一^ニ乎^ヲ。(『論語』学而)

朋^{とも}有り、遠^{とほ}きより方^{なら}び来^きたる、亦^{また}た楽^{たの}しからずや。

「方^{なら}び来^きたる」つまり「並んでやって来た」というのですから、「朋」は複数と解するしかありません。むろん、07のように「遠^{えんぱう}方^{ほう}より来^きたる」と訓じて、「朋」が単数なのか複数なのかはわからずじまい。いずれと受け取るかは、もっぱら解釈によるわけです。日本の『論語』注釈書は、一般に「方^は来^{きたる}」(方^{なら}び来^きたる)という訓読を採らず、「朋」を単に「友人」「友だち(友達)」などと訳していることが多いのですが、これまた単複の区別が明確ではありません。本来「友^{とも}だち」は複数を表すはずだと力んでみても、現に日本語では一人の友人でも「友^{とも}だち」と言うのですから、やはり単複は不明瞭としか思えません。管見に入るかぎり、中国の『論語』注釈書では、「方^は来^{きたる}」(方^{なら}び来^きたる)と解している場合も少なからずあり、英訳も「朋」を複数に訳している場合が多いように見受けられます。話のついでに、それぞれ一例だけ挙げてみましょう。

14 有^あ許^あ多^た朋^{とも}友^{ゆう}從^{より}遠^{とほ}而^{して}来^{きたる}、我^{われ}心^{こころ}不^ず更^{また}感^{かん}快^{かい}樂^{らく}嗎^や? (錢穆)

* 許多朋友=数多くの友人

15 Is it not a joy to have friends come from afar? (D. C. Lau)

* friends=friend の複数形

しかし、考えてみれば、単複の曖昧な漢文「朋」を、やはり単複の不明確な日本語「友(だち)」を当てるのは、原文の意味合いに忠実な訳だとも言えるでしょう。そもそも一と二以上を区別するのがどれほどの意味を持つのか、と聞き直ることもできるわけです。

漢文の名詞は、文法上、日本語の名詞と非常に共通点が多く、冠詞が

つきまとうこともないため、甚だ処理が容易なのです。

② 代名詞

代名詞には、人称代名詞・指示代名詞・疑問代名詞・関係代名詞の四種がありますが、ここでは前三者だけを扱い、関係代名詞については後述します。

漢文の人称代名詞は、孤立語だけに、格変化がありません。英語ならば、主格・所有格・目的格と格変化し、一人称単数は〈I, my, me〉、三人称単数は男女に分かれて〈he, his, him〉または〈she, her, her〉、一人称複数〈we, our, us〉、三人称複数〈they, their, them〉などとなります。つまり、人称・単複・性別によって語形が変化するわけです。最も語形変化の少ない二人称でも、単複同形とはいえ、〈you, your, you〉のように、わずかながら格変化を起こします。しかし、漢文の人称代名詞にこうした語形変化が生じることはなく、一人称はいかなる場合でも「我・吾・予・余」などと記され、敢えて複数を示したいときに「等」を付けて「我等」とするくらいです。そもそも漢文では人称代名詞の使用頻度が少なく、たいていは名や字、または号を用いて人を指し示しますので、さして気遣う必要はありません。二人称「君・汝」が相手を手をそれなりに敬った丁寧な言い方、それに対して「爾・汝」が日本語で言えば「おまえ」程度のぞんざいな言い方だとわかっていさえすれば、ほぼ用は足りります。

ただし、漢文の代名詞にも、もとは主格・所有格の区別があった、と想わせるような文例があるのもたしかです。次の一文を見てください。

16 我善養吾浩然之氣。(『孟子』公孫丑上)

我善く吾が浩然の氣を養ふ。

主格は「我」(＝I)、所有格は「吾」(＝my)と書き分けてあります。時代によっては、または記録者によっては、このような区別があったのかもしれませんが。

けれども、実際問題としては、こうした書き分けに神経を尖らせる必要はなく、たとえば「我」については、主格ならば単に「我」または「我」「我」、所有格ならば「我」、目的格ならば「我」「我」などと訓読しておくだけのこと、すなわち、日本語では、助詞を附け足して文法格を表すことになります。単に「我」と読んで主格を表す場合は、零助詞を補っていると考えればよいでしょう。

指示代名詞も似たようなものです。主格は単に「此」または「此」と読むだけ、所有格も「此・其・夫」などと助詞「ノ」を補えばそれまでのこと。目的格も「此」「之」のごとく助詞で容易に処理できます。

疑問代名詞は、ちょっと注意が必要です。現代中国語ならば、聞きたいところに疑問代名詞を置けばよい。「あなたは何を言っているの?」でしたら、「你说什么?」となります。「你」が「あなた」、「说」が「言う」、「什么」が「何」に当たります。後述するように、中国語は〈SVO〉が基本構文ですので、現代中国語では、〈O〉を尋ねたければ、そのまま〈O〉の位置に疑問代名詞(ここでは「什么」)を入れればすむのです。語順は変化しません。

ところが、古典中国語すなわち漢文では、英語の〈wh-〉で始まる疑問代名詞〈what, who, etc.〉と同じく、疑問代名詞が文頭方向へと移動し、動詞に先行します。つまり、〈SVO〉の〈VO〉が倒置を起し、

〈SOV〉の語順になるのです。次の例文を見てください。

17 天何言哉。(『論語』陽貨)

天何をか言はんや。

これは反語文で、「天は何を言うだろうか(いや、何も言わない)」すなわち「天は言葉などを口にしない」との意味になります。動詞「言」の目的語が疑問代名詞「何」ですので、本来の〈VO〉すなわち「言何」が倒置を起し、〈OV〉すなわち「何言」の語順になっています。訓読としては、疑問代名詞「何」が目的語ですから、格助詞「を」を附け、さらに疑問を表す係助詞「か」を補って「何をか」と読むわけです。もう一つ、主語〈S〉がなく、目的語が動詞と倒置され、目的語+動詞〈OV〉が剥き出しになった例を見てみましょう。

18 誰毀誰譽。(『論語』衛霊公)

誰をか毀り誰をか誉めん。

「誰かをけなしたり誰かをほめたりする」意です。動詞「毀・誉」の目的語が疑問代名詞「誰」ですから、それぞれ倒置を起して「誰毀」「誰誉」という語順になっています。送り仮名として「を」を用いる点は、右の17と同じです。

倒置などという文法現象を見ると、大いに不安になるかもしれませんが、けれども、〈SVO〉の〈O〉が疑問代名詞ゆえに〈V〉と倒置を起して〈SOV〉となれば、何のことはない、日本語と同じ語順になるわけです。その証拠に、17にも18にも返り点がありません。こうした〈V

○の倒置は、容易に処理できるのです。次のような例文では、「与」を「与にす」と訓ずるのが少し難しいかもしれませんが。

19 誰^{たれ}と^{とも}与^よに^にせん。 (『論語』述而)

誰^{たれ}と^{とも}与^よに^にせん。

もちろん、主語が疑問代名詞となる場合は、倒置を起こしません。主語は文頭に位置するのが一般ですので、さらに文頭へと寄せる余地がないからです。一つだけ例文を挙げておきましょう。

20 孰^{たれ}不^レ知^レ礼^レ。 (『論語』八佾・述而)

孰^{たれ}か^{れい}礼^{れい}を^し知^らざらん。

主語が疑問代名詞「孰」ですので、疑問の係助詞「か」を送って読むだけのことです。念のため構文を確認しておけば、この一文は、主語「孰」・動詞「知」・目的語「礼」から成る〈SVO〉の構文で、否定を表す副詞「不」が動詞「知」を修飾しています。「不」は、日本語としては打消の助動詞「ず」を当てて訓読しますが、漢文としての品詞はあくまで副詞です。

③ 形容詞

漢文の形容詞は、やはり一切の語形変化を起こしません。日本語の形容詞には活用があり、「正し」ならば、未然形「正しから」・連用形「正しく」……のように活用しますが、漢文の「正」は、否定の副詞「不」

が冠せられても「不正」、接続詞「而」を伴っても「正而」のごとく、「正」はどこまでも「正」のままです。したがって、訓読にさいしては、「不正」「正・而」のように、活用語尾を送らなければなりません。もっとも、日本語の形容詞はク活用とシク活用さえ覚えておけば事足りるのですから、さしたる負担にはならないでしょう。むしろ、英語で悩まされる比較級や最上級も、漢文の形容詞には存在しません。次の例文を見てください。

21 季氏富^{メリ}於^ニ周公^{ヨリ}。 (『論語』先進)

季氏^{きし}周公^{しゅうこう}よりも富^とめり。

この「富」は明らかに英語の比較級〈richer〉に相当する語ですが、「富」という単語そのものには何も変化が起こりません。「於」を比較の対象を表す語、つまり英語〈than〉に等しい前置詞と解してこそ、「富」の内実が比較級だとわかるのです。これは漢文の解釈上は大きな障害になりませんが、考えてみれば、実は日本語と似たようなもの。日本語の形容詞にも比較級や最上級がないからです。たとえば、英語〈better〉を訳すとき、日本語の形容詞「良い」に比較級がないため、不自然な日本語であることを承知のうえで、「より良い」などと訳してしまうこともあるでしょう。最近の若者たちは、「より詳しい説明」「より高い建物」のような言い回しに、ほとんど不自然さを感じないようですが。

なお、21の「富」を形容詞と説くのは、あくまでも漢文としての話です。訓読の日本語「富めり」は、動詞「富む」に、完了の助動詞「り」を存続用法として加え、形容詞と同じく、ある種の状態を表現した言い回しです。

漢文の形容詞は、日本語の形容詞と同じく、名詞を修飾したり補語になったりします。右の21は形容詞「富」が主語「季氏」の補語となっている例です。構文それ自体については、後述することになります。

名詞を修飾するときは、必ず名詞の前方に形容詞を置きます。決して後方から名詞を修飾することはありません。「そんなこと、当たり前ではないか!」と言うなかれ。わかりやすく「黒板」を例とすれば、中国語でも「黒板」、英語でも「blackboard」。たしかに、形容詞「黒」≡「black」が名詞「板」≡「board」に冠せられています。しかし、形容詞を名詞の後方に置く言語も決して少なくありません。同じく「黒板」でも、たとえばフランス語では「tableau noir」ですし、タイ語でも「nɔːnɔːn/kɔːdandam」となり、「板」を表す名詞「tableau」または「nɔːnɔːn/kɔːdandam」に対して、それぞれ「黒い」意の形容詞「nɔːi/ɔːdan」が後置されています。いずれも屈折語の英語とフランス語、また、ともに孤立語の中国語とタイ語でも、それぞれ形容詞と名詞の結合順序が異なるのです。

こうして考えれば、漢文と日本語が共通して「(形容詞+名詞)」という結合形式を基本としていることは、漢文訓読にとって甚だ幸運であったと考えてよいでしょう。語順については一切の変換を必要とせず、単に「白雲」は「白雲」(白き雲)、「勇者」は「勇者」(勇ましき者)と訓読みしさえすれば、そのまま日本語になるのですから。むしろ、長きにわたって「白雲」「勇者」の文字結合に慣れ親しんだ結果、現在は「白雲」「勇者」と音読みするだけで意味が理解できるようになっているわけです。

この幸運は、形容詞句について最も良く当てはまるかもしれません。日本語は、「たしか半年ほどまえ子どもと一緒にテレビで観たことのある

映画」などという言い回しが可能です。長々しい形容詞句「たしか半年ほどまえ子どもと一緒にテレビで観たことのある」が前置され、後方の名詞「映画」を修飾しています。それと同じく、漢文でも次のような表現が用いられます。

22 好_ム徳如_レ好_ム色者 (『論語』子罕)
徳を好むこと色を好むが如くする者

上方の形容詞句「好徳如好色」五字が、下方の名詞「者」を修飾しています。この形容詞句「好徳如好色」は、「好_ム徳如_レ好_ム色」(徳を好むこと色を好むが如くす)と訓読すれば、一つの独立した文として成り立ちますが、形容詞句として「者」に掛けるには、「如くす」を連体形「如くする」に活用させるだけです。至って容易な業でしょう。もう一つ、少し複雑な形容詞句の例も挙げておきます。

23 衣_ニ敝_レ緇袍、与_下衣_ニ狐貉_者立_チ而不_レ恥_者
敝れたる緇袍を衣て、狐貉を衣たる者と立ちて恥ぢざる者 (『論語』子罕)

形容詞句「衣敝緇袍、与衣狐貉者立而不恥」十三字が、句末の名詞「者」に掛かる構造です。その形容詞句のなかでも、さらに「衣狐貉」三字が「者」を修飾しています。やはり形容詞句のなかで最後に読む「不」≡「ず」を連体形「ざる」に変えればすむのですから、難しいことはありません。

要するに、漢文の「(形容詞(句)+名詞)」構造は、日本語とまったく

同じ構造であるため、きわめて容易に処理できるのです。右の23に見えるような長い形容詞句そのものの訓読は、いささか難度の高い作業になります。

もっとも、形容詞がすべて返り読みせずにすまえられるかというと、そうはゆきません。少数とはいえ、返読が必要となることもあります。その典型が「難」と「易」でしょう。もちろん、単独で用いられるときは、ただ「難」(難し)・「易」(易し)と読み、あとは適切に活用させるだけです。

24 為^た君^み難^へ、為^た臣^{しん}不^ふ易^{えき}。(『論語』子路)
君たるは難く、臣たるは易からず。

しかし、「難」「易」に動詞が下接する場合には、「難^レV」(Vし難^{がた}し)・「易^レV」(Vし易^{やす}し)のごとく返読せざるを得ません。たとえば、次のような例です。

25 君子^{くんし}易^{えき}事^じ而^じ難^{がた}説^{せつ}也。(『論語』子路) *説^{せつ}悦^{えつ}。
君子は事へ易くして説ばしめ難きなり。

「易^レ事^じ」「難^レ説^{せつ}」は、それぞれ英語〈easy to serve〉〈difficult [hard] to please〉に相当する表現です。この「難」と「易」の返り読みについては、有名な左の詩句で記憶しておくのが最も便利かもしれません。

26 少年^{せうねん}易^{えき}老^{らう}学^{がく}難^{がた}成^{がた}。(伝〔宋〕朱熹「偶成」詩)

少年^{せうねん}老^{らう}易^{えき}く 学^{がく}成^{がた}り難^{がた}し。

なお、前に述べた「形容詞(句) + 名詞」構造を一般化すれば、形容詞的修飾構造Ⅱ(修飾語 + 被修飾語(名詞))と捉えることが可能です。このように一般化しておけば、たとえば修飾語が形容詞(句)でなくとも、すべて一律に形容詞的修飾語として扱うことができます。具体的には、次のような例を念頭に置いてください。

27 城^{しろ}門^{もん} 城^{しろ}の門^{もん}
28 獸^{けだもの}心^{こころ} 獸^{けだもの}のごとき心^{こころ}
29 流^{なが}水^{みづ} 流^{なが}る水^{みづ}
30 落^お石^{いし} 落^おつる石^{いし}

27・28は、それぞれ名詞「城」「獸」が「門」「心」を修飾しています。28の「獸」は比喩を表す語です。また、29・30は、動詞「流」「落」が「水」「石」を修飾しています。このように修飾語が名詞や動詞でも、形容詞的修飾構造Ⅱ(修飾語 + 被修飾語(名詞))という一般形さえ用意しておけば、いずれも形容詞的修飾語と見なすことができます。なお、時として形容詞的修飾構造に、結合辞「之」が介在する場合もあります。けれども、この(修飾語 + 「之」 + 被修飾語(名詞))型の「之」は、ただ機械的に「の」と訓じておけば宜しく、日本語としての不自然さが生じてても、気にする必要はありません。

31 人之^{ひと}言^{げん} (『論語』子路)
人の言

32 学問之道 (『孟子』告子上)

学問の道

33 覧物之情 (宋) 范仲淹「岳陽樓記」

物を覧るの情

34 不_レ忍_レ人之心 (『孟子』公孫紐上)

人に忍びざるの心

31・32の「之」は、日本語の「の」とまったく同じ機能を果たしていますので、何ら抵抗なく受け取れるでしょう。

ただし、33・34の「之」は、そのまま「の」と訓ずると、日本語としては引っかけを覚えるに違いありません。なぜなら、「の」の直前に見える「覧る」「ざる」は、ともに連体形のため、そのまま体言すなわち名詞「情」「心」につなげて、「物を覧る情」「人に忍びざる心」と言うのが自然な日本語のはずだからです。わざわざ「の」を入れるのでは、何のために連体形にしたのか、わけのわからぬ話にも感じられるでしょう。けれども、現行の訓読では、こうした「之」も機械的に「の」と読み、日本語としての不自然さには目をつむるのがふつうです。かつては、この種の「之」は置き字とし、読まずにすませることもあったのですが。

④ 副 詞

漢文の副詞は、英語の副詞と同じく、動詞や形容詞を修飾します。その位置は、すべて被修飾語に先立ちますので、英語のみならず、日本語の語順とも一致しますから、原則として返読を必要としません。論より証拠、左の例を見てください。

35 微笑_カ 微笑_ニに笑ふ

36 空_ニ死_ス 空しく死す

37 甚_ニ大_ニ 甚だ大なり

38 極_ニ寒_ニ 極めて寒し

35・36は、副詞「微」「空」がそれぞれ動詞「笑」「死」を、37・38は、副詞「甚」「極」がそれぞれ形容詞「大」「寒」を修飾しています。

英語の文副詞と同じく、漢文にも文全体を修飾する副詞があることを確認しておきましょう。

39 不幸_ニ、短命_ニ 死_ス矣。 (『論語』雍也)

不幸、短命にして死せり。

「不幸」二字は、下文「短命死矣」全体を修飾する文副詞と考えてよいでしょう。英語で言えば、〈Regrettably, Unfortunately, Unhappily, Unluckily〉(遺憾なことに、不運にも、残念ながら)などの文副詞に相当します。これについても返り読みは生じません。

ただし、否定の意味を含む副詞は、打消の助動詞「ず」を用いて訓読する関係上、どうしても返読せざるを得ません。日本語では「ず」が文末に位置するからです。否定を表す代表的な「不」について、二つの例を挙げておきましょう。40は動詞「至」を、41は形容詞「固」を否定する例です。

40 鳳鳥不_レ至。 (『論語』子罕)

鳳鳥^{ほうてういた}至^{いた}らず。

41 学^ベ則^レ不^ナ固^コ。〔『論語』学而〕
学^{まな}べば則^{すなは}ち固^こならず。

二つとも容易に訓読できる例ですが、否定辞「不」を見慣れていても、その品詞を問われると、あやふやな向きが少なくありません。ぜひ「不」が副詞であることを肝に銘じてください。文法上、「不」は、40では動詞「至」を、41では形容詞「固」を修飾しているのです。否定というのは、あくまで「不」が持つ意味であり、文法機能とは別の話です。副詞「不」は、副詞それ自体や助動詞をも否定します。それぞれ二つずつ例を示してみよう。

42 不^フ多^タ食^シ。〔『論語』郷党〕

多^{おほ}くは食^くらはず。

43 勇^{ゆう}者^{しや}不^フ必^ヒ有^ユ仁^ニ。〔『論語』憲問〕
勇^{ゆう}者^{しや}は必^{かな}ずしも仁^{じん}有^あらず。

44 朽^く木^{ぼく}不^レ可^カ雕^ル也。〔『論語』公冶長〕
朽^{きう}木^{ぼく}は雕^えるべからざるなり。

45 不^レ能^ハ正^ス其^シ身^ミ。〔『論語』子路〕
其^その身^みを正^{ただ}しくすること能^{あた}はず。

42・43は、いわゆる部分否定の例で、「不」が副詞「多」「必」を修飾し、それぞれの意味を否定しています。また、44・45は、「不」が助動詞「可」「能」を否定します。英語であれば、語順が「cannot」となり、助動詞「can」に対して否定辞「not」が後置されますが、漢文では、あ

くまで副詞「不」が助動詞「可」「能」に前置され、否定の意味が上から下へと掛かります。

「不」と同様に打消の助動詞「ず」を以て訓読する否定辞「弗」も、文法的にはまったく同じ、否定する語に対して前置されますから、やはり「不」のように返読を必要とします。

46 至^シ德^{トク}者^{モノ}、火^カ弗^レ能^ハ熱^カ、水^{スイ}弗^レ能^ハ溺^カ。〔『莊子』秋水〕

至^し徳^{とく}の者^{もの}は、火^か熱^{あつ}からしむること能^{あた}はず、水^{みづ}溺^{おほ}れしむること能^{あた}はず。

再読に打消の助動詞「ず」を用いる再読文字「未」「盍」も、やはり返り読みが必要です。

47 吾^ワ斯^シ之^ノ未^レ能^ハ信^{ズルコト}。〔『論語』公冶長〕

吾^{われ}斯^{これ}を之^{こゝ}の未^{いま}だ信^{しん}ずること能^{あた}はず。

48 盍^ソ各^ニ言^ハ爾^ニ志^シ。〔『論語』公冶長〕
盍^{なん}ぞ各^{おの}の爾^{なんぢ}の志^{こころざし}を言^いはざる。

47は、再読文字「未」に含まれる否定の作用が助動詞「能」に及びます。日本語として奇異に響く「斯を之」は、下方の動詞「信」の目的語「之」が「斯」に身をやつして上方に倒置され、その下に倒置の標識「之」が附いたものです。「斯」は、本来「信」の目的語ですから、助詞「を」を補って「斯」と訓じ、倒置の標識「之」は機械的に「之」と訓読してしまいます。

48は、再読文字「盍」の含む否定の意味が動詞「言」に掛かっていま

す。「盍」の再読「ざる」は、係助詞「ぞ」に呼応して係り結びが生じ、「ず」が連体形に活用したものです。

以上、「副詞＋動詞」「副詞＋形容詞」「副詞＋文」を確かめ、また副詞「不」について、「不＋副詞」「不＋助動詞」の例を挙げ、さらに否定辞「弗」および否定の意味を含む再読文字「未」「盍」について確認しました。

このほか、副詞に関しては、疑問副詞や副詞句についても調べなければなりません、その確認・検証は次稿に譲りたいと思います。

【註】

- (1) 日本語の系統については、今日なおも定説がない。ここでは、いわゆる北方説に従い、暫くウラル・アルタイ語族に属するものと見なしておく。
- (2) オランダ語や英語を漢文訓読流に読解しようとする蘭文訓読・英文訓読の概要については、拙文「漢文訓読と英文解釈——『英文訓読』宿命論」（川本皓嗣・井上健『編』『翻訳の方法』、東京大学出版会、一九九七年／一九七二―五頁）を御参照いただきたい。詳しくは、森岡健二『欧文訓読の研究——欧文脈の形成——』（明治書院、一九九九年）をも参照のこと。
- (3) 漢字が渡来する以前に日本固有の「神代文字」が存在したとする説もあるが、今日学術的にはまったく認められていない。ここでは、『平安』斎部広成『古語拾遺』（八〇七年）序が記す「蓋聞、上古之世、未_レ有_レ文字。貴賤老少、口々相伝、前言往行、存_レ而不忘_レ」蓋し聞く「上古の世、未だ文字有らず。貴賤老少、口々に相伝へ、前言往行、存して忘れず」と現行方式による訓読に従い、漢字に先立つ文字は日本に存在しなかったものと考えておく。
- (4) 悉曇は、古代インドの文字すなわちサンスクリットを指す。日本では、平安時代以来、真言宗など密教系の仏教で、真言（仏陀の言葉）を正確に唱えるべく、その文字と発音に関する研究が行われた。また、反切は、中国語の発音を示す古典的な方法である。たとえば、「孔」字の発音を「康董切」（康董、切）と表示し、上字「康」kouの語頭子音<g>と下字「董」touの語頭子音を除いた<ou>とを合成して<kou>と発音することを示す。
- (5) いわゆる五十音図が誕生したのは、平安時代末期のことである。最も古い五十音図

の類例は、醍醐寺所蔵『孔雀経音義』（平安中期写本）に見えるが、ア行・ナ行を欠く。ほぼ今日の五十音図に近い例は、明覚『反音作法』（一〇九三年／一〇九五年写本）が載せる。詳しくは、馬淵和夫『五十音図の話』（大修館書店、一九九三年）などを参照。

- (6) 『漢』許慎『説文解字』は九、三三三字を載せるが、（後魏）張揖『広雅』で一八、一五〇字とほぼ倍増し、『梁』顧野王『玉篇』は二二、七二六字、『唐』顏真卿『韻海鑑源』は二六、九一一字を収録する。ちなみに、その後（明）張自烈『正字通』で三三、四四〇字と増加の一途をたどり、『清』張玉書ほか『康熙字典』は四七、〇三十五字を載せる。

- (7) 『鵬外全集』第二十二巻（岩波書店、一九七三年）三五六―三五七頁。

(8) 注(7)同書四一三頁。末尾に見える「熟く」は、暫く「熟く」と訓じたが、鵬外は「熟く」のつもりであったかもしれない。あるいは、この「く」は「く」（二の字点）の誤植で、本来は「熟く」と読むべき字であった可能性もある。

- (9) 鵬外が記した「岳陽樓記」引用部分の冒頭「日月」は、一般に「日星」に作るが、今、鵬外が記した「日月」のまま論じる。なお、「曜」は「耀」と通用し、「概」は「桿」の別体字。

- (10) 『Krahe』を「くなあべ」(Gestade)を「げすたあべ」と記していることから見る と、『Bade』の「ばあべ」は誤植で、正しくは「ばあび」の可能性が高い。『Bade』と『Gestade』が脚韻を踏む点からも、本来は「ばあび」かと思われる。

- (11) 「ドイツ語の訓読では今一つ理解しづら」と言う向きに、『ヴィルヘルム・テル』の同「箇所」の英訳(In the sun on the lake little waves are leaping. On the soft grassy bank the shepherd-boy sleeping) J.C.F.von Schiller, *Wilhelm Tell*, translated and edited by William F. Mainland, The University of Chicago Press, Chicago and London, 1972, p. 5 を提供しよう。これを鵬外流に訓読すれば、あらまゝ次のようになろう。

<In>	><the sun>	><on>	><the lake>	<little waves>	<are leaping>
なかに	ザサン _の	うへ _の	ザレイク _の	ちひやきウェーンズ	はねあがり
<On>	><the soft grassy bank>		<the shepherd-boy>	<sleeping>	
に	やはらかきグラス _{のはゆる} バンク		ザシェパードボーイ	ねむれり	

全体で「ザレイク_のうへ_のザサン_のなかに、ちひやきウェーンズ_はねあがり、やはらかきグラス_{のはゆる}バンクに、ザシェパードボーイ_{ねむれり}」となる。現在の日本語は、英語から積極的に語彙を借用しているので、「ザ」が定冠詞<the>だとわかれ

ば、「サン」「レイク」などはそのまま理解できる可能性があり、「ウェーブズ」の意味も見当がつくかもしれない。しかし、「グラス」は〈グラス〉(ガラス、〈飲み物の〉グラス)と取り違えるおそれ大きく、「バンク」も、〈湖畔〉ではなく、「銀行」と誤解する確率が高いのではないか。「ザシェパードボーイ」に至っては、「シェパード」が牧羊犬であることを知らなければ、〈シェパード犬のような顔をした少年〉と誤解するかもしれない。むしろ、〈lead〉(〈leading〉の原形)を「lead」が「(lead) (〈leading〉の原形)を「lead」と誤読するような習慣は、まったく存在しないわけである。

- (12) 『令義解』巻一「職員令」の〈大学寮〉条に「音博士二人」とあり、義解に「掌教^レ音^レ」(音を教ふことを掌る)と見える。また、巻三「学令」の〈先読経文〉条に「凡^レ学生、先読^レ経文。通熟^レ、然後^レ講^レ義」(凡そ学生は、先づ経の文を読め。通熟して然る後に義を講ぜよ/現行方式による訓読)とある。『新訂増補 国史大系』『令義解』(吉川弘文館、一九九〇年〔普及版〕三九・一三〇頁)。

- (13) 『令義解』巻三「学令」の〈先読経文〉条に「其試^レ読者、毎^レ千言内、試^レ二帖三言^レ、講者、毎^レ二千言内、問^レ大義^レ一条。掇^レ試^レ三^レ条、通^レ二^レ為^レ第^レ一^レ、及^レ全^レ通^レ、斟^レ量^レ決^レ罰^レ」(其の読者を試みるは、千言の内ごとに、一帖三言を試みよ。講者は、二千言の内ごとに、大義一条を問へ。掇て三言を試みよ。二に通ずるを第と為せ。一に通ずるのみ、及び全く通ぜざるは、斟量して決罰せよ)とあり、末尾「斟量決罰」の「義解」に「斟^レ酌^レ」(其管絃の多少、博士随^レ杖^レ量^レ決^レ)とあり、末尾「斟量決罰」に、博士^レ杖^レ随^レ杖^レ量^レ決^レす/現行方式による訓読)とある。注(12) 同書一三頁。

- (14) この光源氏の言葉は「大和魂」という語の初見であり、〈漢学の素養〉を意味する「才」に対して、〈日本人としての実務能力〉を指すと解するのが通説である。

- (15) 地図帳に関する論議は、帝国書院編集部『編』『新詳高等社会科地図』(帝国書院、五訂版、一九九二年)および同『編』『標準高等地図——地図で読む現代社会——』(帝国書院、初訂版、二〇〇九年)に基づく。張競『時代の憂鬱 魂の幸福——文化批評というまなざし——』(明石書店、二〇一五年)二六七―二六九頁の一文「地名表記は文化の連続性に配慮すべし」にも同じ趣旨の論議が見える。

- (16) 曹斗鉉『編著』『模範 漢文入門』(一志社、一九七二年、ソウル)二〇五頁。懸吐の有無・多少および語彙については、読解者によって揺れが生じる。

- (17) 中世ベルシア語(いわゆるパフラヴィー語)のウズワリシユンに関する記述は、全面的に黒柳恒男『ベルシア語の話』(大学書林、一九八四年)五五―七二頁その他に基づく。文中に「知ったかぶり」と記したように、私のベルシア語に関する知識は、もっぱら同書から得たものにすぎず、もし事実誤認があるとすれば、一に私の理解不

足による。なお、黒柳氏は、中世ベルシア語の読解に困難をもたらす要因を四つ指摘している(六一頁)が、すべて大なり小なり日本語にも当てはまる点が興味深い。第一の「一文字多音」は、多層構造の日本漢字音(呉音・漢音・唐音・慣用音)および複数の音価を持つ仮名「う」などが抱える問題に通じよう。第二の「文字結合形」は、草書による漢字の連綿体を想起させる。第三の「史的記法」は、旧い表記を残しつつ新しい発音で読むという点において、歴史的仮名遣い(いわゆる字音仮名遣いを含む)の問題そのものと称しても過言ではあるまい。第四の「ウズワリシユン(訓読語詞)」は、本文に述べたとおり、日本語の訓読みと同じ現象であり、中世ベルシア語の文章のなかで実際にウズワリシユンがどのくらいの比率で用いられたかは、同書が載せる文例とその音訳(六九―七一頁)で確認できる。ただし、黒柳氏の記す「訓読」(六四頁その他)が「訓読」の意であり、「訓読」ではない点には注意が必要だろう。その意味では、同氏が現代日本語にたとえて挙げている「梅花」を「うめのはな」と読む例(同頁)は、いささか適切を欠くかと思われる。「うめ」と「はな」のあいだに修飾関係を表す格助詞「の」を補読するのは、甚だ初歩的とはいえ訓読作業の一環であり、決して訓読みそのものではないからだ。「梅花」を単に訓読みすれば、あくまで「うめはな」にとどまる。むしろ、これは、「うめ」が元来「梅」の音読みであったこととは無関係の話だ。

- (18) 渡部昇一『英文法を撫でる』(PHP新書、一九九六年)一五五―一八九頁。